



TITLE:

封建制と王政 - イギリス封建制の特質(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

富澤, 霊岸

CITATION:

富澤, 霊岸. 封建制と王政 - イギリス封建制の特質. 京都大学, 1969, 文学博士

ISSUE DATE:

1969-07-23

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/213172>

RIGHT:

【 9 】

氏 名	富 澤 靈 岸 とみ さわ れい がん
学 位 の 種 類	文 学 博 士
学 位 記 番 号	論 文 博 条 45 号
学 位 授 与 の 日 付	昭 和 44 年 7 月 23 日
学 位 授 与 の 要 件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	封建制と王政

—イギリス封建制の特質—

論文調査委員 (主査) 教授 前川貞次郎 教授 井上智男 教授 今津 晃

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、一般に相対立し相反撓する性格をもつと考えられている封建制と王政とが、イギリスにおいては調和・協調的に作用しあって発展し、独自の封建制を展開したことを実証したものである。

「序章」において、イギリスのノルマン征服前後の歴史をみると、封建制の発展と国王権、王政の進展とが時期的に一致している点、またイギリス封建領主権の実態をみると、封建所領が国王権によって重大な制約をうけている点、さらに王政の進展が封建制の発展と不可分である点などを問題として提起する。そしてこれらの問題をノルマン征服前後の時期について具体的実証的に究明することを本論文の中心課題とすることをのべる。

「第一章 アングロ・サクソン時代における王政の発展」。七王国時代の戦乱期、すなわち早期サクソン社会においては、メイズとよばれる血縁共同体内に、封建的支配関係、封建的階層分化が進行しつつあるとともに、メイズがより大きな地域的国家的共同体に統合されてゆく過程において、血族的家長権という私的な権限から、より広い地域の人民 folk を保護し統合する、より公的な国王権が誕生してくるのをのべる。そうしたサクソン国王権理念がイングランド国王権理念に高められてくる時点を、国王保護権の高揚を示す諸法典について考察する。そしてそれをマーシア王国の発展の伝統を継承し、デーン人の侵入を契機として国家的民族的団結が高まってくるアルフレッド王からエセルスタン王時代（9～10世紀）に求める。ついでこの国家統一体制を維持し実現してゆく中央・地方の行政組織の確立と発展を考察する。すなわち、私的な王廷がより公的な国政事務を扱う中央官庁として成長してくること、地方行政組織については、かつての地方伯の伝統と調和をたもちながら、王政を地方に実現してゆくものとしての州郡制が10世紀中ごろに成立してくること、またその間に州知事制が発展し、州知事が国王の代官であると同時に地方伯の権限を継承する地方伯の代理でもあったこと、いわば州知事制の発展の中に、サクソン王政の発展と封建制の発展とが相互に依存し利用しあうものとしてあったことを明らかにする。

「第二章 アングロ・サクソン時代における封建的所領の形成」。本章ではイギリスにおける封建的土地

所有の原型ともいえるべき「封建的所領」booklandの形成過程を考察する。封建的所領が形成される以前は、ゲルマン的共同体的社会を構成する一般的自由民たる家父長たちが、民有地volklandの一部を分前地として保有していたが、この民有地段階から封建的所領が成立する過程に、豪族、貴族たちが国王への奉仕の代償として自己の民有地の分前地保有の他に、民有地の一部を領有する過渡的段階（民有地領有段階）があった。この民有地領有権の実体を史料によって具体的に考証し、それが封建的領有権とほとんど変わらないものであったことを究明する。そしてこの豪族、貴族による民有地領有形態は、民有地の統一的管轄者である国王が、貴族たちに恩貸するという形をとったものであり、また封建的領有権を確認する「領有権利証書」bookも、国王が認証したものであり、いずれも国王権に発源するものであった。この意味でアングロ・サクソン時代における封建的所領の形成過程は、同時に国王権の発展を背景にしたものといえる。

「第三章 アングロ・サクソン時代における封建領主権の成長と王権」。本章では、封建的領主権が、財政、行政、裁判、軍制などの局面において、どのように伸展したかを具体的に、王権の発展との関連において究明する。封建領主の財政的支柱ともいえるべき封建地代の成立については、本来、国王へ納められるべき国家的公共的貢租であったガヴォルが、国王の「領地権利証書」によって貴族・教会へ領地を譲渡してゆく際に、その領地に関する貴族たちの封建地代とみとめられることになった。行政面では、自由民の領民化、領民共同体にたいする封建的支配をすすめてゆく封建領主側の意図と、領民共同体の保証組織である十人組組織を州・郡制の末端として王政を徹底深化させてゆく単位組織としようとする王政側の意図とが互いに依存しあいながら保証制が発展した。つぎに領主裁判権は、この裁判権が、人民法、人民権を統轄するものとしての国王裁判権を背景として展開したものであった。また軍役については、サクソン時代に国家的公共的軍役であったfyrd軍役を、封建領主は領内における国王への軍役義務を監督する立場を利用して、これによってみずからの封建的支配の強化をはかり、国王もまた末端地域の封建領主的支配関係を利用して国家的軍役の徴発を確保した。

「第四章 ノルマン征服とその評価」。本章ではイギリス封建制の発展におけるノルマン征服の意義について諸学説を整理批判しつつ、いわゆる「連続説」の立場に立って、封建制と王政との発展において、ノルマン征服がもつ歴史的意義を明確にする。

「第五章 ノルマン征服後におけるイギリス王政の発展」。ノルマン王朝時代に王政は中央政庁としての王廷が、大法院の設置、最高司法官制の設立、全国巡回裁判官制の施行などに象徴されるように、もはや国王個人の意志によって左右されない、その意味で impersonal な国政として、国王と封建貴族官僚との協調のもとに封建王政の基本的体制が形成された。とくにヘンリー2世時代から大憲章にいたる時期に、一連の重要な諸立法によって封建慣習法が確立された。またこの時期には一団の有能な行政官僚がきたえあげられ、国王の統治機構が整備された。そして大憲章は、ヘンリー2世時代以来形成されてきた封建的慣習法の尊重と維持とをめぐって展開された、国王と封建貴族たちとの闘争や協調を通じてはぐくまれてきた法治観念の結実であった。その後の王政の発展は、国王が封建的特権のすべてを一身にあつめ、官僚制統治機構の頂点に位置してそれを私物化してゆく方向、専制化の道をたどり、絶対王政への移行を示すことになる。このことは地方共同体の統合を象徴した州知事制の解体にもみられる。それは国王と地方封建

領主との協調による封建王政の解体を示すものであり、国王が州共同体を犠牲にして強力な集権制を展開し絶対王政化してゆく動向を物語る。

「第六章 ノルマン征服後における封建制の進展と王政」。ウィリアム征服王による各封建領主への騎士役賦課は、イギリス社会の封建化を示めずと同時に強力な征服王権の誕生を意味するものであり、これを封建化の観点からのみでなく、国制史的発展、王政の発展の観点からもとらえる必要がある。また征服後の相互保証制の発展は、強力な征服王権が公共法廷を通じて自由民を直接支配し、不自由民にたいしては領主法廷を介して、領主の領民支配を介して間接的に把握するという二つの路線によって進められた。以上の分析からイギリス王政の発展と封建領主権の伸張とは互いに矛盾するものとしてではなく、互いに依存しあうものとして発展したものであったことが明らかである。このことは、また国王法廷と領主法廷との関係、国王大権と封建領主裁判権との関係についてもいえる。イギリス封建王政は村落共同体を、封建領主を介して間接的に把握するか、州・郡制を通じて直接的に把握するか、これら二つの方法を用いて支配したのである。

最後に「終章」において、イギリス封建制の最盛期の問題を取りあげ、封建制と王政との協調という特徴が最もよく発揮されたサクソン末期から征服前後の11世紀に求められると結論する。

論文審査の結果の要旨

イギリス封建制に関する歴史的研究は、いままでノルマン征服以後の時代については多くなされていたが、本論文は比較的閑却されていた「征服」以前のアングロ・サクソン時代に焦点をあて、ノルマン征服以後の封建制の基礎が、すでにアングロ・サクソン末期に形成されていたことを史料にもとづいて実証した。

とくにイギリス封建制の特質が、国王権と封建領主権との調和・協調的発展にあることを、行政、財政、裁判、軍事などの諸局面について、諸学説を批判検討しつつ、根本史料によって詳細に分析究明した。なかでも国王の発布した諸法典や「領地権利証書」などを利用しこれを綿密に検討して封建領主権の実体をあきらかにした点は、著者のすぐれた業績として高く評価さるべきであろう。

著者の封建制の概念については、なお究明さるべきものがあるが、王政と封建制の相互媒介的役割を重視してイギリス封建制の特質を具体的にあきらかにした本論文は、イギリス中世史、ヨーロッパ封建制の研究に寄与するところ大きい。

よって本論文は文学博士の学位論文として価値あるものとみとめる。